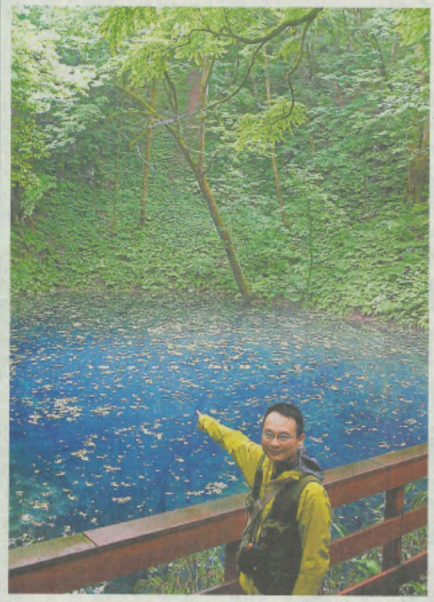
# 白神でジオツーリズムを

## 青池、断崖、巨岩・奇岩…見て感じて

## 鄒講師（弘大）がコース作り



【写真上】白神山地のジオツーリズムスポットの一つ・十二湖の青池を案内する鄒さん＝7月26日
【同下】地表に出ている部分だけで高さ4㍍超の巨岩

世界自然遺産登録30周年を迎える白神山地で、地形や地質などを観察して楽しむ「ジオツーリズム」を広めようと、弘前大学農学生命科学部の鄒青穎講師（応用地形学）がモデルコース作りに取り組んでいる。７月下旬、鄒さんの案内で、深浦町の十二湖周辺を歩いた。（赤田和俊）

「森の物産館キョロロ」から向かったのは「大崩」の観察スポット「鶏頭場の池」。この日は雨雲で隠れていたが、通常は大規模な地滑りでむき出しになった乳褐色の岩盤が見える。33個の湖沼群である十二湖は、約300～600年前に地滑りが何度も発生し、川がせき止められるなどして生まれた。鄒さんの推計では、地滑りした土砂の体積は1・1億立方㍍で東京ドーム約90個分。とてつもない量だ。鄒さんが「白神山地は地滑り多発地帯。理由は割れやすい安山岩でできているから」と教えてくれた。

続いて「青池」へ。高さ約25㍍の切り立った崖に囲まれた池が、澄み切った青い水をたたえていて、まさに秘境だ。この青の秘密も地形にあった。

鄒さんらによる電気探査で、池近くの地中に断層が見つかった。そこからきれいな地下水が湧いているため水が澄み、最深約9㍍の水底が青く見えると考えられるという。また、池を囲む崖は地滑りで押し寄せた土砂の末端部分。急斜面のため雨が降っても土砂が流れ込まず、水が濁らない。

遊歩道沿いに崖の上へ登ると、巨大な岩が現れた。地表に見える部分だけで高さ4㍍超。約1㌔先の大崩から流れてきた安山岩だ。地中には同じような巨岩が大量に埋まっているといい、あらためて自然のエネルギーを実感した。鄒さんは「実際に目で見て大きさを感じたり、歩いて地形の変化を体験したりしてほしい」と話す。

白神山地の本県側ではほかに、1500万年前の地盤が見られる高さ150㍍の断崖「日本キャニオン」や、大岩やガンガラ穴などの「巨岩・奇岩」など見どころが多い。

鄒さんは県外の高校生をモデルコースに案内するなどして、より分かりやすいガイドの仕方を研究中。深浦町観光課の神林友広課長も鄒さんの取り組みに期待しており「例えば下北の仏ケ浦と日本キャニオンは同じ凝灰岩で、成り立ちが似ているのが面白い。ジオ的魅力を説明できるガイドがもっと増えれば」と語った。

### 魅力伝えるガイドが鍵　先行する秋田側

白神山地の秋田県側では、秋田県八峰町の「八峰白神ジオパーク」が2012年に日本ジオパークの認定を受け、ガイドツアーなどを通じて魅力を伝えている。

八峰白神ジオパークは、柱を束ねたような「椿漲岸の柱状節理」や、奇岩の間を流れる渓流「三十釜」、地滑りで生まれたブナの水源林「留山」など20のサイトがある。同パークのＰＲ活動は現在、短時間の学習ツアーが主体で、昨年度は約550人が参加した。県内外からの観光誘客が課題だ。

同パーク推進協議会事務局である町産業振興課の木藤誠課長補佐は、ジオパークの魅力を伝えるには、知識を持ったガイドによる説明が鍵―と話す。同パークでは20年にガイドの会を発足させ、現在は18人が登録。有料ガイドツアーの利用者も徐々に増えてきた。

木藤さんは「ジオパーク単体で観光客を呼び込むには限界がある」と話す。同町は、食など他の魅力と組み合わせた誘客への可能性を探る。

本県側でのジオツーリズムについては「青池や日本キャニオンなど、人々の目を引くサイトが多いのが魅力」と可能性を高く評価した。（赤田和俊）

上記の画像は，当該ページに限って”東奥日報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。